

ふくやま文学館友の会だより

2019年（令和元年）10月30日発行

〒720-0061

広島県福山市丸之内1-9-9

ふくやま文学館友の会事務局

TEL (084) 932-7010

FAX (084) 932-7020

第21号



第十九回文学探訪「松山俳諧の三庵めぐり」に参加して

藤井 淳子

五月二十六日晴天。岡崎先生が作られた資料の説明を聞きながら、青い海と新緑のしまなみ海道をバスで松山へ。まず種田山頭火終焉の地「一草庵」へ到着。山頭火は明治十五年山口県防府市に生まれた。子規の弟子、河東碧梧桐の流れを汲む萩原井泉水門下の自由律俳句の俳人である。世間や家族を捨て、酒と放浪の末に安住の地を求め、五十七歳で松山の「一草庵」に入り、翌年亡くなった。山頭火の俳句は形式にこだわらない感じのままの自在な表現が魅力だ。簡素な庵の回りは、萩など植物が植えられ山頭火の句碑が立っていた。

鉄鉢の中へも霰

放浪の果ての位処や若葉風

次には今は駐車場になっているが夏目漱石、正岡子規ゆかりの「愚陀仏庵」跡地を見学。

いよいよお楽しみみの昼食。ANAクラウンプラザホテルの最上階、プロバンスダイニングでバイキング。シェフ自慢の五十種類の料理が並び、スイーツやフルーツも充実して感激。国の重要文化財「萬翠荘」と新緑の松山城を眺めながら、ゆったりした食事は大満足。

午後、江戸時代の俳人栗田樗堂の「庚申庵」へ。樗堂は松山俳諧の祖といわれ、酒造業「兼屋」と、町方大年寄役を務めながら俳諧に遊ぶ。五十二歳で俳友たちと余生を風雅に暮らそうと「庚申庵」を結ぶ。現在松山城西麓のビルに囲まれた「隠れ家」のような庵で、樹齢二百年の大きな野田藤の若葉が風に揺れていた。庭には池もあり、梅、桜、牡丹、花菖蒲など季節の花や木が植えられた庭園を眺めながら、復元に尽力された先生からお話を聞く。

五月雨や庚申庵の閑なる

栗田樗堂

最後は子規記念博物館へ。学芸員から子規の幼少期からの生涯や俳句などについて説明を受けた。漱石とのかかわり、脊髄カリエスを患ってからの壮絶な生き様に感動した。

記念館駐車場にはつぎの句碑と歌碑があった。

ふゆ枯れや鏡にうつる雲の影 子規

半鐘と並んで高き冬木哉 漱石

足なへの病いゆとふ伊豫の湯に飛び
ても行かな驚にあらませば 子規

美しい装丁の「子規歳時」を一冊買った。
有意義で楽しい文学の旅だった。



ふくやま文学館友の会 第19回文学探訪「松山俳諧の三庵めぐり」(2019.5.26)
(種田山頭火の終焉の地)

第十八回福山及び近接市町村ゆかりの文学者 夏目漱石

プロフィール

村上信子

幼少期・学生時代

漱石は一八六七（慶応三）年二月九日（旧暦一月五日）、江戸牛込馬場下横町（現・新宿区喜久井町一番地）で、町方名主の夏目小兵衛直克、千恵の五男末子として生まれ金之助と名付けられる。生後すぐ四谷の古道具屋に里子に出されるが、一歳の時、四谷の名主塩原昌之助の養子となる。九歳の時、養父母の離婚により塩原姓のまま夏目家に戻る。その後、二十一歳の時、夏目家に復籍。十二歳の時、東京府第一中学校（現・日比谷高校）に入学、二松学舎に転校し漢学を学ぶ。文学に進むことを志すが兄に職業にはならぬと反対され、大学予備門予科に入学する。第一高等中学校本科英文科に進学、一八九〇（明治二三）年、帝国大学英文文学科（現・東京大学）に入学、帝国大学大学院に進む。東京高等師範学校英語科（現・筑波大学）の教師に就任する。この頃、英文学を研究することの必要性に悩む。

正岡子規との出会い

二十二歳の時、大学の同級生の正岡子規と共通の趣味である寄席を通じて親交を深め、子規自作の「七草集」の批評も書く。この時初めて漱石の号を用いる。（『晋書孫楚伝』の「石二漱ギ流レニ枕ス」から「頑固者」の意味）。子規から手紙を受け取り退学を思い留めさせようと急遽、松山の子規の実家を訪ねる。そこで高浜虚子と出会う。その後、子規は中退する。漱石は東京での教師の職を辞し松山中学校（現・松山東高等学校）の英語教諭となる。子規は記者として従軍していたが病気のため帰郷し、漱石の下宿に転がり込む。ま

た漱石は本格的に俳句を作り始め、その下宿を愚陀仏庵と呼ぶ。松山中学校を一年で辞職し、熊本第五高等学校（現・熊本大学）に講師として赴任する。その頃、福山藩の士族であった貴族院書記官長中根重一の長女鏡子と見合いし結婚する。熊本では寺田寅彦などに俳句を教える。

イギリス留学

一九〇〇（明治三三）年、文部省より英語教育法研究のため二年間イギリス留学を命ぜられる。留学費不足、英文学研究への不安、孤独感から強度の神経衰弱に陥る。帰国の直前、子規の訃報に接する。一九〇三（明治三六）年、帰国し、第五高等学校を辞し、第一高等学校と東京帝国大学英文科講師に就任する。漱石は熊本でも東大でも小泉八雲の後任として起用される。その頃、鈴木三重吉も漱石の家に出入りするようになる。

小説公表

一九〇五（明治三八）年、高浜虚子の勧めで書いた「吾輩は猫である」を俳誌「ホトトギス」に発表。漱石はイギリス文学のユーモアと落語の笑いの要素を取り入れ傍観者の立場で知識階級を書き好評を博す。翌年「坊ちゃん」「草枕」「二百十日」を発表。鈴木三重吉の提案で面会日を毎週木曜日と定める「木曜会」の起りである。



一九〇七（明治四〇）年、朝日新聞社の熱心な招聘により、教職を辞し、朝日新聞社に入社する。漱石の作品のすべてが朝日新聞に連載される。「虞美人草」発表。牛込区早稲田南町に転居（漱石山房と呼ばれる）。この頃から胃病に苦しむ。「坑夫」「文鳥」「夢十夜」「三四郎」「永日小品」「それから」「門」などを連載。「三四郎」「それから」「門」は初期の三部作と言われる。

胃病

一九一〇（明治四三）年、胃潰瘍を患い入院、療

養先静岡修善寺で多量出血し人事不省に陥る。帰京後、再入院する。その体験を「思い出すことなど」に書いている。このことは後の漱石の作品に大きく影響する。文部省からの文学博士号授与を固辞する。過労のため強度の神経衰弱と胃潰瘍に悩まされる。

一九一四（大正三）年、「こころ」を連載。「彼岸過迄」「行人」「こころ」は後期の三部作と言われている。「硝子戸の中」「道草」を連載。「道草」は漱石の自叙伝的小説と言われ、漱石の自由にならなかつた現実の世界が書かれている。この頃、芥川龍之介、久米正雄、松岡譲が木曜会に参加する。

一九一六（大正五）年、「明暗」を連載し始めるが、胃潰瘍の病状が悪化し四十九歳で死去する。小説家としての漱石

漱石の小説の大半は傍観者として知識階級を描き男女の三角関係の恋愛が主題であるが一貫して倫理的で「秩序と良識」の作家と呼ばれている。東洋と西洋の思想が根底にある。漱石は多くの門下生を育て近、現代の文学の今なお第一人者である。

漱石と妻鏡子

漱石の妻鏡子は、ソクラテスの妻と並び悪妻と言われる。お嬢様育ちの鏡子は朝寝坊し漱石に朝食を出さぬまま出勤させるなど、当時の常識の良妻賢母などからは、そのように受け取られたかもしれない。しかし、今日的にみれば鏡子は漱石を尊敬し全力で支えた良き妻であったことが言動からうかがえる。「漱石の思い出」の中で鏡子は、漱石のことを卒直に語っている。漱石の孫の半藤末利子（長女筆子の四女）は「真実を述べたからと言って少しも漱石の偉大さを減じたりしない」ということを誰よりも承知していたのは鏡子自身であったかもしれない。あれほど悪妻呼ばわりされても自己弁護をしたり折を見て反論を試みようなどとはしない人だった」と述べている。

「中根重一の墓を掃苔する」

福山市東部市民大学講師 園尾 裕

文豪夏目漱石の妻は福山藩士の娘であることを知ったのは、もう十数年も前のことである。東京へ出張の際、漱石の岳父である中根重一が眠る浄土宗心光寺を捜したことがある。小石川にある寺の境内は、都心の寺院らしくさほど広くはなく、中根家墓地を捜すのに苦労はなかった。本堂の左前辺りに立派な墓石が数基並んでいる。

漱石の妻はキヨ(鏡子)で、重一の長女である。中根家は、福山藩の下級士族であった。重一の父は、同じく福山藩の築田家から入り婿に来た忠治という人である。ペリーが浦賀へ来航した二年前に江戸で重一は生まれており、かなりの秀才で、東京大学医学部の前身であった「大学東校」に選抜されて入学している。ドイツ語を勉強し、鏡子が生まれた明治十年七月には、県立新潟病院(新潟大学医学部の前身)に就職して、『眼科提要』や『虎列刺病論』などの医学書を翻訳している。その後、東京に戻り官僚生活に入る。明治二十七年には、貴族院書記官長に就任しており、鏡子や下の妹二人など家族は優雅の絶頂期であった。明治二十九年六月、鏡子は十歳年上の漱石と結婚して熊本に新居を構える。

ところが重一は、明治三二年に書記官長を退き、三年後には第四次伊藤内閣の総辞職に伴い、官僚を辞した彼の人生は下降線をたどる。さらに、相場や鉱山事業に失敗したせいで、かなり金策に窮したようである。

ところで、鏡子は福山で出生したというようなことを書いた本がある。『夏目漱石周辺人物事典』では、夏目鏡子の項に「広島県深津郡福山町西町(現・福山市)に生まれる」と載っている。また、漱石の弟子赤木桁平著『夏目漱石』の年表には、「広島県深安郡福山町西町士族中根重一長女鏡子と結婚す。」とあり、これがその後の諸書に引かれたものと私は思っている。西町は「深安郡」であったことなど一度もない。

それにしても心光寺の中根家墓地を掃苔した限

り、重一の先祖は享保年間に亡くなった人の墓もあり、私は純粋な江戸詰の阿部家臣だと思っっている。なお、鏡子の祖父忠治の生家である築田家から、中外商業新報社(日本経済新聞の前身)の社長になった鏡子より二歳年上の欽次郎がいる。

会員の広場

「ウミガメ」

特別会員 松岡 幾 男

私が傘寿を迎え、男孫が中学二年生となった。母から叱られてうなだれた細い首を見ると、すっかりせえ、いろいろなことが次から次へと起こってくるぞ、と励ましたくなる。



でも、将来については不安ばかりなのが普通なので一生懸命勉強して自分になにができるかを探す旅に出よう。そのうち親と別れたり、友と散り散りになったり、絶望したり、健康を損なったり、一人ぼっちで淋しいといつてもウミガメのことを思えば我慢ができる。

夏の真夜中になると徳島の日和佐の浜辺にウミガメがあがってきて、ピンポン球のような白い卵を産んでいくのだが、二度とそこに戻ることはない。卵からかえった子カメは、砂から這い出て必死に潮騒を頼りに海辺を目指すのだけれども、お母さんの姿が見えない。広い海に出て方々彷徨っていてもたまに大きなカメに出会うと近づいていき、

「もしや私のお母さんではありませんか。」と尋ねるのだけれど、どちらもこれまで一度も顔を合わせたことがないのだから誰だかわからない。大きなカメはかぶりをして、「いつかお母さんに見えるといいね。」と言いつつどこかに行ってしまう。実はその大人のカメもその歳になるまで一度もお母さんと会ったことがないんだ。子カメはもしお母さんに出会ったらお父さんのこと、自分の生まれた時のこと、兄弟のこと、まだ行ったことのない深い深い海のこと、そして先の戦争のこと

とを聞いてみようと思いなおして、小さな平泳ぎをして、また山のような大きな波を登っていくんだよ。たいへんだなあ。

「一度、お母さんの顔が見たい。」
視覚障害者の天才ピアニスト辻井伸行さんの願いである。

俳句

浮草の隙間すき間の雲の白 稲垣 知子

駆け寄れる子の後れ毛に秋の風 奥山 清美

一草庵でころり往生草茂る 北村 京子

新緑の天守真面ランチビュッフェ 渡邊 みつほ

稲を刈る棚田幾重に老二人 野遊びに心づくしのお弁当

朴葉味噌匂ふ奥飛驒しぐれけり 静まりし上下街道の中ほどに

手をひかれつぶらな瞳入園す 翁座のあり吊るし柿あり

野遊びに心づくしのお弁当 大正につくられし翁座の格天井

静まりし上下街道の中ほどに 若き館長の声透りくる

翁座のあり吊るし柿あり

大正につくられし翁座の格天井

日 石 輝 子



潮の香に旗なびかせて 鞆の浦大漁願い
漁夫の唄

戦争を知らない世代が古希となり
明日はどう成る暦をめぐる



珈琲の香り

安達道子(一瀉千里)

シャレた喫茶店の二階の
透明な ガラス窓から
道行く人々を見るのが 好きだった

無造作に 動いているようにみえる人影も
その人は その人なりの独自の人生を
いつも背中に背負っている

喜びあり、
哀しみあり
悔しさあり 驚きあり



シャレた喫茶店の くゆる珈琲の香り
やさしく まとわりついて
ひとは たったひとつの人生の中をゆく旅人

「元祖美咲桃太郎伝説とその由来」

黒瀬光輝

ここ岡山県久米郡美咲町打穴に桃太郎伝説がある。昭和三年に発刊された「三保村誌」の中に載っている桃太郎伝説だが、実はこれが昭和五年に発刊された「日本三大桃太郎伝説(①岡山県吉備②香川県鬼無島③愛知県犬山)」より早く、元祖を名乗っている。この桃太郎伝説に登場する「鬼山」「退治山」などの地名が美咲町に今も残っている。そして、桃太郎も鬼も幸福をもたらすものとして、今も町民にあげられている。

二〇一九年九月〜二〇二〇年九月
「友の会」の活動計画
友の会会長・岡崎忠

一、『友の会だより(第二号)』発刊
二、現地文学館Ⅲ 第一回『若国・西条の探訪』

今回から、見学範囲を「備後文化圏」から「山陽文化圏」に広げました。第一回は、宇野千代(小説家)の故郷「若国」及び大庭みな子(小説家)山口誓子(俳人)ゆかりの酒都「西条」を訪ねます。

日時 二〇一九年十一月一〇日(日)
場所 千代の生家跡・墓地・小説の舞台半月庵・みな子ゆかりの神笠家・誓子ゆかりの賀茂泉酒造と酒都「西条」の酒蔵めぐり

三、第六回文学講座

今年度は、文学館の企画展に併せて、夏目漱石(小説家)について学びます。

日時 二〇一九年十一月三十日(土) 午後一時
三十分から三時三十分
内容 「小説の中の夏目鏡子」

講師 岩崎文人(ふくやま文学館館長)
朗読 朗読の会「虹」による漱石の妻夏目鏡子

述・松岡譲筆録『漱石の思い出』の朗読
場所 ふくやま文学館研修室

四、第六回文学講演会

ふくやま文学館に親しんで頂くために、近隣在住の作家及び講師を招き講演を聞く研修会です。

日時 二〇二〇年一月二十五日(土) 午後二時
講演 第五十一回「中国短編文学賞」入賞者

「月の人」則直真衣さん
朗読 「雨上がりに」中村聖子さん

朗読の会「虹」による作品の紹介
場所 ふくやま文学館研修室

五、特別企画『文学探訪』について

次年度は「友の会」発足二〇周年記念行事として「文学探訪」「現地文学館Ⅲ」を併せ、オリピックの終了した秋季(二泊二日)に「横浜・鎌倉の文学探訪」を企画します。

六、「鱒二忌」(井伏鱒二没後二十七年)

井伏鱒二を偲び、歩んだ道や作品を通じて、その業績を顕彰します。

日時 二〇二〇年七月(鱒二の命日に近い日曜日)
場所 ふくやま文学館研修室

内容 「井伏鱒二の業績を偲んで」記念講演及び朗読の会「虹」による「作品」の朗読
主催 ふくやま文学館・ふくやま文学館友の会
後援 井伏鱒二在所の会・井伏鱒二文学研究会

編集を終えて

編集委員・岡崎・岡田・杉之原・深川・村上
ふくやま文学館は今年、ふくやま文学館友の会は来年、それぞれ二十周年を迎えることとなりました。これも一重に、友の会会員の皆様及び文学愛好者の皆様のご支援ご協力の賜と、厚く御礼申し上げます。

二十周年にあたり、記念事業として、文学館はこの十月に「夏目漱石展」開催。友の会は、来年秋に「横浜・鎌倉の研修旅行(一泊二日)」として、今までの活動をまとめ「冊子の発刊」を予定しています。

今後、皆様のご期待に沿うよう、斬新でユニークな取組を進めて参ります。皆様のご意見ご要望をお待ちしております。

